

# Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

## 患者の心を写す絵はチーム医療の一員 北里大学北里研究所メディカルセンター病院（埼玉県北本市）



自然光が印象的な病院棟エントランスホール。院内コンサートの会場にもなる。右奥には創立者・北里柴三郎の銅像とグランドピアノ

「事を処してパイオニアたれ。人に交わって恩を思え。そして叡智をもって実学の人として、不撓不屈の精神を貫け」——科学者・教育者・社会事業家として日本の近代史に特筆される業績を遺す北里柴三郎が門下生に常々説いた教えた。この精神を基に北里研究所を中心とする大学や病院のグループは構成されている。

創立75周年に当たる1989年、21世紀を視座に据え、研究所の未来を託す施設として北里大学北里研究所メディカルセンター病院が開院。発案は現名誉理事長の大村智氏。天然有機化合物の世界

的研究者である一方、女子美術大学理事長を務め、美術への造詣も深い。埼玉・北本市の旧農林省農事研究所果樹園跡地に同病院を建設するに当たっては、79年に開発した抗寄生虫薬・イベルメクチンの特許料収入などで得た私財を投じた。

八十川要平病院長に病院と絵のつながりを尋ねた。「背景には、新しい時代の医療と文化の発信地たれとの名誉理事長の思いがあります。今、北里大学はチーム医療の実現を重点施策として取り組んでいます。絵もチーム医療を構成する一員と言えるのではないのでしょうか」



病院の外観。開設記念に寄贈された桜（陽光）をはじめ、四季折々の植物に彩られる



廊下に設置された血圧計の後ろにも絵が。診療空間との間に隔たりはない



右手はベルナルド・カタン(仏)の作品。岡田謙三や鈴木信太郎のコレクションも収蔵



女子美大の学生の作品にデジタルプリントグラフィックスを施行。ドアやカーテンに使用



産科の病棟。院内の明るい環境づくりに絵が果たす役割は大きい



王森然記念館。王氏は大村氏と親交のある中国の芸術家・教育者。館内には絵の収蔵庫もある

病院は大村氏の人となりやを反映し、近代医学に自然と芸術を融合させた「ヒーリングアート」をコンセプトに独特の空間を形成。無機質になりがちな医療機関の印象とは異なる安らぎを与えてくれる。

「美術館のような病院」という共通認識は今や患者や家族に広く浸透している。院内の廊下を彩るたくさんの絵画。モチーフ、画材、手法は千差万別。まるで見る者の心を写し取るようだ。現在、病院では約350点を収蔵。展示は定期的に入れ替える。グループ全体では1600点を超える作品を所有。

大村氏の縁もあり、女子美大との共同作業で院

内環境を考える実技授業を実施。小児科や産科では今も大小さまざまな作品が温かく迎えてくれる。

2007年までは「人間讃歌大賞展」を主催し美術作品の公募を行ってきた。審査には大村氏のほか、画壇の権威が当たる本格的なもの。受賞作の一部は病院で定期的に公開されており、鑑賞も可能だ。

絵のほかにもう一つ病院を特徴付けているのが豊かな自然。敷地は埼玉県立自然観察公園と林でつながっている。春は花を咲かせ、初夏には新緑、秋の紅葉、冬には雪化粧。天候によっては四方の連峰や富士山が見える。

# 遊び心あふれる子供と親のための病院 独立行政法人国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）



チャリティーコンサートも開かれるエントランスホール

➔ のセンターに受診に来た子供は、病院に抱くイメージがほかの子供とは違って来るだろう。一歩中に入ると、一般の病院と違った空間が広がっているのに驚かされる。しかも、遊具やオブジェが随所に置かれているのだ。

エントランスホールは3階までの吹き抜けで、天井から吊り下げられた鳥のオブジェが静かに動いている。

正面入り口上部のガラス面には、「空」をイメージしたスタンドグラス仕様の演出が施されている。その下には、中国の女性書道家による「心」の文字が躍る。「遠く離れていても心はつながっている」という気持ちを込めたものだという。

正面入り口横の子供を預かるプレールームでは、

子供たちがアニメに見入っていた。その奥の部屋には、クマの機関車に引かれた貨車があり、その車内は家庭で起きやすい事故から子供を守るための親子の学習コーナーとなっている。

ホールから下のフロアを見下ろすと、コーヒーカー、花屋、コンビニ、ボランティアショップなどが並んでいる。

階段を下りていくと、途中、小さな滝が連なっており、水の音が心地良い。中庭に面した通路沿いにはいすとテーブルが用意されており、親子がパンを食べたりジュースを飲んだりしながら談笑している。病院らしからぬ光景に、街中にいるかのような錯覚に陥る。

外来診療部門の2階と3階にも、子供たちの興



パステルカラーに包まれた救急センターの家族控室



コーヒーカーやコンビニなどが並ぶ「テルドレンズモール」



ボールが体内を循環する機械仕掛けの恐竜



病棟生活を送っている子供が遊具で遊んだり緑に触れられる屋上庭園



子供たちがごみの分別を身近に感じられるように色と絵で表示された分別ごみ箱



5つの立体オブジェが一つのストーリーになっている。取っ手を動かすとオブジェの一部も動く

味を引くような遊具やオブジェが各所に置かれている。機械仕掛けの恐竜、おとぎ話の人形、動物の形をしたいす等々。

子供たちは親の手をほどいて立ち止まっては、遊具やオブジェを触っている。こちらも思わず子供心に戻って見入ってしまう。

5階の屋上庭園では、入院患者がほかの来院者に気兼ねすることなくパジャマ姿のまま戸外に出

て、遊具などで遊ぶことができる。

各階に置かれている分別ごみ箱や案内板は絵や色分けで表示されており、子供にも分かりやすい。

国立大蔵病院と国立小児病院が2002年に統合し、国立成育医療センターが誕生。今年4月に独立行政法人化した。大蔵病院の前身である陸軍病院だったころの面影はみじんもなく、平和な時代にふさわしい病院になっている。